

地区、二十三ヶ寺からなる世義寺が形成された。

一八六七年十月に大政奉還、十二月に王政復古の詔が出され、翌正月からは戊辰戦争も始まった。そのような中で新政府は三月から神仏分離令を発した。その実質的な全国への波及は地方で区々であるが、宇治・山田は一八六八年七月に度会府となり、府知事橋本実梁及び「仏寺は大小を論ぜず、すべて廃止」を主張する浦田長民らが中心となり、比較的早く、その結果が現れてきた。八月、九月には内宮の鳥居前である宇治で廃寺となる寺が現れた。住民の中には神葬祭を願ひ出る者が多く、寺院は経済的收入が断たれることにもなつて、十月には住職からの最初の還俗(復正)の願ひ出が度会府にあった。以後、神葬祭の出願、宗旨除名が二月にかけて広がり、十二月までに百二十余ヶ寺が還俗願ひを出した。度会府下の仏教寺院の動静を記した明治二年四月の『神郡仏寺興廢事略』付「度会府下寺院檢録」には神仏判然令から約一年経ったその当時の復正により廃寺となった寺院名や残存している寺院名が挙げられている。今、寛文の大火の際に移転した寺院についてみれば、寺町を形成していた越坂地区では三十ヶ寺が三ヶ寺に、岩淵領前田地区は九ヶ寺が五ヶ寺に、河崎領東河辺地区は十一ヶ寺が四ヶ寺となり、もはや寺町の体をなしていない。

本発表は現在、進めている「宗教都市伊勢(宇治・山田)の江戸時代の景観の復元」の一環であり、最終的に目指す研究の成果は景観の復元である。今回の発表は山田を中心とした二度の大きな仏教界の変革に関して、その基礎データの分析を試みたものである。

## 東京都二十三区域西北部の「路傍の地蔵」

清水 邦彦

寺・宗派とは無関係に路傍に於いて地蔵が祀られることは、日本では日常風景となつている。先行研究では、地蔵と道祖神とが習合したため、路傍に地蔵が祀られるようになったとされてきた。私はこの通説に長年疑問を持っていた。路傍に地蔵が祀られるようになったのは大凡江戸時代以降だが、管見の及んだ中世史料・中世地蔵説話の集大成を目指した『三国因縁地蔵菩薩靈驗記』(一六八四年刊)及び『地蔵菩薩感應伝』(一六八七年刊)・『延命地蔵菩薩經和談鈔』(一六八七年刊)・『地蔵菩薩利益集』(一六九一年刊)・『延命地蔵菩薩經直談鈔』(一六九七年刊)・『地蔵菩薩應驗新記』(一七〇四年刊)には道祖神との習合が説かれていないからである。本発表では現地調査に及んだ東京都板橋区・練馬区・中野区・杉並区の、路傍の地蔵を分析することで、道祖神との習合説の是非を問う。

「路傍」の定義であるが、本発表では、寺の境内・門前及び墓地(門前を含む)・私有地以外とした。特に墓地の定義は難しいが、とりあえず現代日本人が見て墓地と見なすであろう場所を除いた。「地蔵」の定義も難しいが、形態論的に地蔵を見なせるものとし、現地の人々が地蔵と呼んでいても、形態論的に地蔵でないものは除いた。

当該地域の、路傍の地蔵の銘文を見ると、江戸時代に造立されたと思われる全八十四体のうち、十八体に「二世安楽」(類似

表現を含む）の言葉が見られる。これとは別に「菩提」・「念仏供養」・「逆修」といった言葉も見られる。これ以外のものは、おおよそ銘文が無い、もしくは銘文から造立目的が読み取れないものである。とすると、当該地域の、路傍の地蔵の多くは、「二世安楽」もしくは「後生善処」を願って造立されたものと考えられる。ここで早くも道祖神との習合説が否定される。道祖神の職能をまとめるのは困難だが、少なくとも、道祖神に後生善処を願うことは稀であろう。

では地蔵の設置場所はどうだろうか？ 当該地域の「路傍の地蔵」八十四体のうち、村境に祀られたのと考えられるのは五カ所に過ぎない。年代の早いものとしては、杉並区和田一ノ五八・十貫坂の地蔵（一七二七年造立）がある。杉並区井草一ノ三・井草観音堂の地蔵（一六六七年造立）・杉並区高円寺南五ノ三二の地蔵（一六七六年造立）・板橋区大谷口二ノ十三の地蔵（一六七七年造立）に比べると、十貫坂の地蔵は年代的に遅い。但し、十貫坂の地蔵は、悪病退散の職能が期待されて造立されたという伝承を持つ。しかし、この職能は中世地蔵信仰からの継承と見なすこともできる。

道しるべの職能はどうだろうか？ 地蔵の道しるべの職能もまた道祖神との習合とする説がある。当該地域に於いて道しるべの銘文を持つ地蔵は、一七三〇年以降一般的になる。まず「二世安楽」を願って路傍に地蔵像が造立されるようになり、近郊の農民が江戸へ野菜等を売りに出かける便宜を図るため、一七三〇年代になって、道しるべの職能が付加されたと考えられる。「農民」と判断したのは、道しるべの銘文が「是より□

道」・「多ど屋」等平仮名と漢字とが混交しているからである。当該地域に関する限り、路傍に地蔵が造立されたのは、もともと「二世安楽」を願ってであり、また、道祖神と共通する職能を有するのは一部の地蔵に限られる。路傍に地蔵が祀られるようになったのは、道祖神との習合からではない。路傍の地蔵と道祖神との習合は後に生じた現象なのである。

### 神概念をめぐる言説空間

——現代日本の場合——

近 藤 光 博

本研究では、現代日本語における「神」という語の使用例を二百余り収集し、その意味内容を分析するとともに、この語にまつわる言説空間をコミュニケーションの成立の在り方という観点から検討した。

《現代日本語の言説空間》において「神」という語は、あまりに自由闊達、ほとんど無原則なかたちで使用され通交している。これは事実上、日本語話者にとって「神」という語がほとんど無内容に等しいということの意味する。教科書記述等から判断する限り、こうした状況に対し、国家権力も規制を設けず、むしろこれを追認しているとみなしうる。

現代日本語の「神」という語は「西洋的」な性格をつよく帯びるようになっていく（その実態は、キリスト教とギリシア神話の無自覚な混合）。その一方、日本列島古来の神道系／民俗系の「神」「神々」の観念も、必ずしも「神」という呼び名／